直言


Crucial jet part found in ocean

By Joseph A. Reaves
Chicago Tribune

TOKYO—An important piece of evidence was found Tuesday on Mount Mikuni that could help explain why a Japan Air Lines jumbo jet crashed into a mountain, killing 520 people.

The piece, a section of the vertical stabilizer, or tail fin, of the plane, was found by Japanese rescue workers who had been searching the area since the crash late on the night of Aug. 12.

A U.S. spokesman said the piece was found with the number 2 part of the rear jet assembly attached to it. The spokesman said, but, at once disclosed of the piece's discovery, that the piece was found with the number 2 part of the vertical stabilizer "no bigger than a man's hand." He said that pictures would soon be released.

"Without a vertical stabilizer, you can't control an airplane," said Dr. Kenneth Kolstoe, a professor of flight safety at Embry-Riddle Aeronautical University in Daytona Beach, Fla., who has been following the crash investigation. "It's the most important piece of evidence found so far. The huge tear in the vertical stabilizer has been the key question. Now we can see that pressure could have been the cause."

Boeing experts were on their

Continued on page 10, col. 1

三角院長が留学中に買い求めた『シカゴ・トリビューン』の記事。写真は生存者の救助の模様

どんな場面でも“生命だけは平等だ”「救急を断らない」という理念目指す

それを忘れず日頃から経営努力することが肝



医療法人徳洲会 副理事長
千葉西総合病院 院長
三角 和雄（みすみ かずお）

また暑い夏がやって来ました。私にとって忘れ難い出来事が41年前の夏に起こりました。1985年8月12日午後6時56分に何が起きたか、ご存知の方が徳洲会全職員約5万人の中で何人おられるでしょうか？ 覚えている方は最低でも50歳以上、概ね60歳前後かと思います。

突然の悲しみをご家族に味わってほしくないという毎夏の強い思い

その日その時刻、史上最悪の飛行機墜落事故（御巣鷹山の事故）が起こったのです。東京・羽田から大阪に向かっていた日本航空123便が、群馬県山中に墜落し乗員・乗客合わせ520人が亡くなる大惨事となりました（生存者4人）。『上を向いて歩こう』で有名な歌手の坂本九さん、端正な顔立ちときれいな取り口の元大関・清國のご家族など著名人や大企業経営者が大勢亡くなりました。急降下する機内で多くの方が家族宛ての遺書を書き残しました。その一人で「ドカンと大きな音がして、白い煙が出た。……○○（子どもの名前）、立派になれ」と残したのが、私の幼馴染で隣家に住み、幼稚園から高校まで私より1学年上ながら、ずっと同じ学校に通ったMさんでした。

Mさんは早稲田大学に進学し、私が東京の大学に入学して右も左もわからない時、面倒を見てもらいました。事故当日、私は米国留学1年目で、お盆にシカゴから帰省しようと思い、大阪の実家に電話をした際、この事故を知りました。親しい人を急に亡くした時、打ちひしがれ、体全体から力が抜けたようになり、悲しみが大き過ぎて声どころか涙も出なくなることを知りました。私は死には2種類あると思います。一つ目は、がんの末期や老衰などで予期される死。もう一つは、あまりにも急で周囲も受け入れ難い突然の死です。今まで元気だった人が、急性心筋梗塞や脳出血などで瞬く間に命を失うのも、飛行機や自動車の事故によって急死するのも突然の死。我々医療従事者は、患者さんの生命を救うという使命とともに、予期された死であれ、突然の死であれ、死というものに向き合わねばならない宿命を背負っています。

この数年の内に両親、兄を相次いで亡くした私ですが、いずれもある程度、予想ができ、心の準備ができていた死でした。それに比べると、肉親ではないものの親しい人が急死した時の衝撃は大きく、このような突然の悲しみを患者さんのご家族に味わってほしくはないと、毎年夏に、その思いを強くしています。

自分たちが頑張らなくても大丈夫とタカをくくっていた当時の当院

では、御巣鷹山の事故はなぜ起こったのでしょう？ その後、①事故機が以前、尻餅事故を起こした後の米国ボーイング社による修理が、手順を守らず不完全だったこと、②それによる隔壁の強度低下を、日航のチェック体制が甘く見抜けなかったこと、③日航という会社組織自体に問題があり、それが②につながった可能性があることが判明しました。そのあたりの経緯は、渡辺謙主演の映画『沈まぬ太陽』に詳しいですが、日航という国策企業がナショナル・フラッグと称し、親方日の丸という体制に胡座をかいて、労使闘争や権力争いに終始し、「安全」という最も大事な理念を忘れていたところに、多くの犠牲をともなう大惨事の素地があったと思います。

私は入職した28年前から徳洲会グループの大発展を見てきました。入職当時の当院はベッド数408床、1カ月の医業収入は4億円程度で現在の7分の1。「計画に対し○千万円の未達成です」と当時の事務長が無表情なまま報告しても、誰からも「頑張ろう」という声は聞かれませんでした。当時でも大きな医療グループであり、「自分たちが頑張らなくても大丈夫」とタカをくくっていたようです。

しかし実情は正反対で、創業者の徳田虎雄理事長（当時）が、ボーナス支給のために各銀行を駆け回り借金をするくらいだったのです。また経営が上向いていた後も選挙違反事件や、コロナ禍などの出来事が続き、心休まる間がありませんでした。これらを経験した私は、徳洲会と、いったん倒産して再生した日航とを思わず重ね合わせて見てしまいますが、医療面で徳洲会が実績を上げてきたのは、どんな場面でも“生命だけは平等だ”、「救急を断らない」という理念を目指していたからだと思います。それを忘れず、日頃から経営努力をしていけば良いのです。

皆で頑張りましょう。

徳洲会循環器内科部会
知見共有しグループ底上げ
発足後初の会合に40人超参加

徳洲会循環器内科部会は7月17日、第34回日本心血管インターベンション治療学会（CVIT2026）の会期に合わせ、都内会場とWEBのハイブリッド形式で初会合を開いた。会場には全国のグループ病院から40人超が集まった。部会長は名古屋徳洲会総合病院の加藤千雄院長。

冒頭、加藤院長は「グループ病院が有する優れた技術や知見を共有し、循環器分野全体の発展を目指していきましょう。同時に、若手医師が施設を超えて研修し、切磋琢磨できる人的な交流環境も整えていきたいです」と展望を示した。

続いて、東上震一理事長が登壇し「循環器は徳洲会のなかでも要となる領域です。各グループ病院が互いに高め合い、学術的な交流を深めながら、徳洲会全体の臨床レベルをさらに引き上げてほしい」と期待を寄せた。

特別講演では、湘南鎌倉総合病院（神奈川県）の松本崇・循環器内科部長が「三尖弁閉鎖不全症に対するカテーテル治療（TriClip）」をテーマに発表。3月に国内で販売開始した新デバイス「TriClip」の治療成績や自施設での取り組みを解説し、「右心機能の正確な評価をはじめとする適切なスクリーニング手順が、治療効果と安全性を担保する鍵となります」と強調した。

さらに、大橋壮樹・医療法人徳洲会副理事長が、米国メイヨークリニック視察報告およびメドトロニック社製品の共同購買について説明。現地で高度な医療サプライチェーン（資材の供給網）や心臓病棟を視察した知見を参加者と共有したうえで、「メイヨークリニックのサプライチェーンと連携し、グループのスケールメリットを生かした割り戻し契約を結びました」と報告。「還元金を各病院の医局運営や医療環境の整備に活用していただければ」と呼びかけた。


全国から循環器疾患にかかわる医師ら40人超が参加


「循環器分野全体の発展を目指します」と加藤院長

参加者と活発な質疑応答を行い、最後に、千葉西総合病院の桃原哲也・副院長兼循環器内科主任診療部長が今後のさらなる団結を呼びかけ、閉会した。

千葉西病院の職業体験イベント
「チバエク」が学生に大好評

千葉西総合病院は7月26日、院内で職業体験イベント「チバエク」を開催、盛況を博した。同イベントは医療職を目指す学生に体験の場を提供し、地域で活躍する医療人材を育てるのが目的。今年で3年目を迎える。例年は7・8月にそれぞれ1日ずつ実施していたが、今年は7・8・9月に午前と午後の2部制（9月は午前のみ）と、規模を拡大した。


看護部ブースでの採血体験の様子

当日はひとつの大きな会場に、看護師や薬剤師、リハビリテーションスタッフ、臨床工学技士など多彩な職種がブースを出展。参加者は自由に関心のあるブースを巡った。看護部のブースでは採血体験や、ブラックライトを用いた手洗い体験を行い、ふだんの衛生管理の重要性を伝えた。

五木田由美子・看護部長室事務主任は「コロナ禍で体験の機会が少なかった学生に、医療職の魅力や当院の雰囲気を感じてほしいです。この体験が奨学金制度や将来の就職にもつながれば」と期待。参加した高校生や医療系学生からは「知らなかった職種への理解が深まりました」と好評。同院は今後もブース内容の充実を図りながら継続していく方針だ。

病気のはなし 232

女性なら誰でも起こり得る
月経前症候群（PMS）

月経前の3～10日間に心身の不調を来すものの、月経の開始とともに、その不調が減退もしくは消失する周期的かつ期間特異的な症状を月経前症候群（PMS）という。不調は人によって異なり、下腹部痛のほか頭痛、乳房痛、むくみ、倦怠感、眠気、食欲亢進・低下など多岐にわたるが、月経周期とともに症状が変化することでPMSを判断する。生殖可能年齢の女性なら誰でも、いつでも発症し得るため、思春期特有の不調や更年期障害と重なる場合や、「若い頃は何もなかったのに30代後半になって」、「出産後に突然」など、さまざまなケースがある。

原因は月経前の女性ホルモンの変動と言われるが、「PMSの詳細なメカニズムは明らかになっていません」と野田総合病院（千葉県）の濵村憲佑・産婦人科部長。このため治療は根治を目指すというより、痛みなど器質的症状の改善および患者さんのつらさの軽減を目指す対症療法が主体で、治療期間も推定しにくい。

命にかかわる疾患でなく、必ずしも治療を要さないが、「つらい症状に耐えても良いことはありません。西洋薬以外にも漢方薬や環境改善など多様なアプローチがあり、それらを総合し、つらさの軽減を目指します」と濵村部長は受診をすすめる。また、「患者さんにとっては耐え難い苦痛であり、長期治療で不安も強いことから、周囲の方の理解・配慮が大切です」と社会環境改善の重要性も訴えている。

